糸と針でつなぐ女たちの記憶

梶村道子（ベルリン・女の会）

2019年９月にベルリンの下町に誕生したコリア協議会が主宰する小さなミュージアム「無音—多音」は、戦時や紛争時の性暴力をテーマに地域に発信しています。このミュージアムで、コリア協議会、ガブリエラ・ドイツ支部、ベルリン女の会の共催で、絵画展「心に受けた傷——フィリピンと韓国の『慰安婦』の絵による証言」が開かれました。展示作品は、韓国の姜徳景さんと金順徳さんの絵の複製、フィリピンのレメディオス・フェリアスさんによるキルト「私が体験した戦争」です。このキルトは、昨年5月から10月まで南ドイツの「地域ー国際 女性文化ミュージアム」で展示されました（『wamだより』vol.42、10頁）。そんな近くに来るのならぜひ、とベルリンにも回してもらい、このキルトを中心にフィリピンにおける日本軍性暴力をとりあげた企画が実現しました。

12月５日、オープニングのパネルディスカッションには、母方の祖父が米軍下で日本軍と戦ったという独比２世のカリンさんが、1941年12月８日に始まる日本軍のフィリピン侵略について原稿を準備してくれました。同じく独比２世のアナリーさんは、日本がフィリピンに建てた自国兵士の慰霊碑を前に天皇夫妻が慰霊訪問をする一方で、日本政府の圧力によりマニラの日本軍性暴力被害者の碑が撤去されたという受け入れがたい現実を報告。アナリーさんにとってフィリピンの歴史を見直すきっかけになったそうです。カリンさんの原稿を代読したカテリーネさんは、日本による侵略が女性に過酷だったのは過去の話ではない、現代の経済侵略=新植民地主義の下で一番重圧を受けているのも女性と、現在の日比関係を批判しました。昨夏マニラのロラズセンターを訪れたニーン・山本=マッソンさんからはサバイバー支援の厳しい現状が報告されました。建物も老朽化し、ロラたちの絵やキルトなど貴重な資料の損傷が心配されています。

パネルディスカッション：右からニーンさん、アナリーさん、カテリーネさん、司会のミヘラさん（スーダン女性グループ）。後ろは姜徳景さんの作品

今年１月末には、監督の竹見智恵子さんの承諾を得て映画「カタロゥガン！ ロラたちに正義を！」のドイツ語字幕版を上映しました。韓国系の観客は当時のまま残る被害の現場に生々しい印象を受け、朝鮮半島とは異なる被害状況が理解できたといいます。コリア協議会のサポートで性暴力の問題を学ぶ中学校の生徒には、加害者の元日本兵の証言が新鮮に映ったようです。10人のサバイバーの声と姿を丁寧に収めた2011年制作のこの映画は、存命者が少なくなった今、貴重な歴史資料ですが、何よりも日本の若い人たちが観る機会を多く設けてほしいものです。

リラ・ピリピーナのシャロン・カブサオ=シルバさんからは、サバイバーにとっての絵画表現の意味を解いたテキスト「記憶、カミングアウト、抵抗」が届きました。アートは、「日本軍性奴隷制の犠牲者には、自らの歴史を語るにもっとも適した方法」であり、「恥じ、ためらい、不安を感じることなく、あの情景を魂の奥底から取り出すことを可能にした」と、シャロンさんは書いています。レメディオスさんのキルトは、引き裂かれた衣服や解けた兵士の靴紐に至るまで、被害の情景を172cm×90cmの大布に驚くほど精緻に再現しています。凄惨な情景を描きながら、針を持つレメディオスさんの視線は自在で、観る者を惹き込まずにはいられません。日本訪問前夜もなおこの作品に針を入れていたと、このキルトを贈られた竹見さんは言います。シャロンさんの言うように、レメディオスさんは「個人の体験を超えて集合的記憶を語る声、残虐な過去から解放されて立ち上がる集団の声」を、竹見さんや日本の私たちに託したかったのですね。

絵画展終盤の２月13日、「地域ー国際 女性文化ミュージアム」のガビー・フランガーさんの申し出で、スライド講演「テキスタイルアート：集合的記憶・サバイバル・勇気・平和」が実現しました。講演冒頭、展示中のキルトの真上の壁に、自作を前にしたレメディオスさんの姿が映りました。古来女性は「正史に書かれない歴史を身近にあった針と糸で記録し、抵抗の手段にしてきた」とガビーさん。1970年代軍政下のチリやペルーから持ち出され、圧政の様子を海外に伝えたキルトは、まさしく縫い綴られた抵抗の歴史です。正史に書かれてこなかった日本軍性奴隷制。その事実を綴って被害回復を訴えたレメディオスさんのキルトを、ガビーさんはこの講演を通して、糸と針でつなぐ女性たちの文化史の中に位置付けてくれたのでした。

レメディオスさんのキルトを背に、ペルーのフジモリ大統領の圧政に抗議する女性たちの作品を解説するガビーさん

＊写真はいずれも筆者提供